

第五回 全国俳句大会 最終選句のご紹介

選句、選評 佐々木 建成（俳人・天宵俳句会名誉顧問）

兼題部門

入賞					優秀賞			会長賞		受賞
九州	中部	中部	関東	関東	関東	関東	北海道	中国四国		支部名
高橋 栄二	平川 晴代	千田 雅俊	鷲澤 典子	大庭 英雄	尾張 幹	吉田 勝彦	村川 義次	長畑 俊二		会員氏名 (敬称略)
久しぶり帰省かなわずテレトーク	新涼や刺つつみ込む水の玉	春の空番い重なり枝動く	走り来る子の掌開けば螢かな	もみじの手離れ風船ひとり旅	弱音など吐いてはおれぬカナナ燃ゆ	秋の夜の寄添うだけの介護かな	子供らを見かけなくなり白木槿	母白寿ここよ四葉のクローバー		選句
					(選評) コロナ禍により閑塞化した昨今の社会に身を置く作者として自ら奮い立たせようとする句だと思えます。「カナナ燃ゆ」は秋の季語の「カナナ」のうち真つ赤なカナナであり、インパクトが強く効果的です。	(選評) 親しい身内が寄り添うだけで介護を受けているお年寄りの心は和み安堵するものだと思います。夜の長くなる秋の季節ならその思いが一層強くなるでしょう。「寄添う」は「寄り添う」にしてはどうでしょうか。	(選評) 少子化の進展に加えて、コロナの居座りもあり、最近公園などで多くの子供たちを見かけることが少なくなりました。季語の白木槿(秋)が寂寥感を誘っています。	(長畑さんより、受賞のお喜びの声) この度投句が会長賞(最優秀賞)に選出され、大変身に余る光栄を賜りまして誠にありがとうございます。この句は春のぼかぼか陽気に(ひねもすのたり/散歩して)とブツブツ言いながら母親と団地内を歩いている様子、白詰草が白寿になる母を祝うように群生しており、それを写した母親が、いきなり百まで頑張る!と言いつつ四葉のクローバーを探して偶然にも見つけた時の心理を描写しました。今はそれを透明のキーホルダーケースに入れて大切に持ち歩いています。母親のように百歳を目指してこの句を味わっていたら幸いです。		(選評) 元気に白寿(九十九歳)を迎えられたお母さんはまだ気持ちは若々しく、幸せの象徴の四葉のクローバーを見つけて少女のように「ここよ」と声を弾ませたようです。季語はクローバー(春)で、首宿の句の魅力です。白詰草(しろつめくさ)ともいい(うまごやし)、白詰草(しろつめくさ)ともいいます。